



## 研修の現場から

～農業高校訪問から学ぶ環境に配慮した農業技術～

2006年2月15日～3月17日の約1カ月間、中央アジア・コーカサス地域8カ国15名の研修員が、札幌市環境局の協力のもと、国レベルでの環境行政、札幌市の環境汚染対策など、日本の環境行政や環境技術を学びました。

研修の一環で、日本の環境に配慮した農業技術、そしてその技術がどのように次の農業の担い手に伝えられているのか等を学ぶために、3月9日に岩見沢農業高校を訪問し、高校が所有するゴミのコンポスト化設備や乳牛の糞尿によるバイオマスガス利用の現場を視察しました。「環境に配慮した農業技術が高等教育のカリキュラムに含まれていることに驚きました(ナイラさん:アルメニア)」等の意見が研修員からあげされました。

また、農業クラブに所属する12名の生徒が、学校および農業クラブの活動についての発表をするとともに、研修員と日本と中央アジアの環境行政や農業の現状についてディスカッションを行いました。研修員にとっては日本の若い世代の考え方につれることができた、高校生にとっては普段あまり馴染みのない「中央アジア」に触れることができた貴重な時間になりました。

(JICA札幌 南雲)



岩見沢農業高校の生徒と交流する研修員



高校の概要等についての説明を聞く研修員



岩見沢農業高校のコンポスト設備を視察する研修員



## 途上国の現場から

北海道のNGO En Vision環境保全事務所がマレーシア ボルネオを訪問しました

北海道のNGO、En Vision環境保全事務所の4名の方々が、JICAの協力のもと、自分たちのこれまでの北海道での経験を活かし、どのような形でマレーシアの環境保全、そして環境と調和したコミュニティー開発に協力を実現するか検討するために、マレーシア、ボルネオ島を訪問し、現地の関係者と意見交換等を行いました。

En Vision環境保全事務所では、10年以上前にマレーシア、ボルネオ島で活動した青年海外協力隊OB・OGの方も活動しており、第二の故郷ともいえるマレーシアに恩返しをしたいとの思いを実現するべく、今回の訪問を企画したとのことです。

「青年海外協力隊として活動していたときから、街の風景などは大きく変わってしまったが、マレーシアの人々の心の豊かさは変わっていない。まずマレーシアの人々と一緒に活動できること、これ自体がとてもうれしい」、「青年海外協力隊として派遣されていた15年ほど前は、熱帯林の伐採が大きな問題となっていた。その後、伐採は行われなくなったが、バームやし等のプランテーションの開発が進められ、地域の生態系は大きく変わってしまった。プランテーション等は人々の生活水準の向上に大きく貢献したかもしれない。しかし、現在の単純な生態系、そしてそれによる周囲への影響は、大きな問題といえる。豊かな自然、心の豊かな人々といったボルネオの潜在的な資源を有効に活用する方法を考えることが必要なのではないか。これからその具体的な方法を検討していきたい。」と金子代表は語ってくれました。

(JICA札幌 荒)



上:マレーシア ボルネオ島のセピロックオランウータンリハビリテーションセンター。ここは、調査団員の一人が青年海外協力隊として派遣されていた場所であり、昔の仲間と久しぶりに再会しました。オランウータンのリハビリの様子が掲示されています

下左中:マレーシア ボルネオ島 キナバタンガン川 ここではテングザルを見るボートツアーが盛んに行われています  
下右:熱帯林を開墾して作られたプランテーション。周囲の環境にも大きな影響を及ぼしています